

## 特集 「ブルーストと二十世紀」をめぐって

—その他いくつかの考察とともに

湯沢英彦

昨年の春、二〇一四年五月十日に明治学院大学白金校舎で「ブルーストと二十世紀」と題されたコロックが開催された。

当日会場には午前中のセッションからコロック終了まで予想外にたくさんの方にご参加いただけた。昨今の外国文学関係の企画イベントとしては特筆に値すべき盛況ぶりであったのではなかろうか。主催者のひとりとしてご来場いただいた方々に感謝の気持ちをお伝えすると同時に、ブルースト関連の研究企画としてはあまり類例がない、どちらかといえばいささか無理な提案に、こころよくご賛同いただいた発表者および司会者・コメンテーターの方々にもあらためて御礼を申し上げたい。

いささか無理な提案というのは、つまりこういうことである。このコロックはブルーストを主題に掲げながらもブルーストの専門的な研究者は誰も発表せず、かわりにブルーストから多か

れ少なかれ刺激をうけた作家や思想家、またブルーストとともに検討すると興味深い著作家などを、それぞれの専門家に取上げて論じていただくことにしたのである。司会およびコメンテーターにはブルースト研究者を配し、専門研究的な立場とそうではない立場の相互交流も狙った。

この意見交換に関しては時間不足でなかなか議論が深められなかったのだが、しかしその一方で、たいへん力のこもった発表がつきつきと続き、専門研究者の集まりでは期待できないようなユニークなブルースト読解ないし受容の線がさまざまな方向に示された。ブルーストと比肩すべき並外れた知性と強烈な個性をもった二十世紀フランス文学・思想の立役者たちが、ブルーストのことばの何に敏感に反応し、また彼の作品のどんな響きに共振しているのかが見えてくる。また同じ問題に出会い

ながらもブルーストとは違った音調に回答が求められ、それゆえにブルーストの奏でた旋律がくつきりと浮かびあがってくる。あたりさわりのない、あるいはときに苦しげな「正解」とは趣をことにするブルースト像が、まさに唯一無二といったさまざまなリズムを透過して結ばれていったのである。もちろん、多分に意図的な読み替えやいささか過剰な思い入れ、これまた行き過ぎの敬遠など、研究の視点からは警戒すべき危ういバイアスには確かに気づかされる。だがその「偏り」はまた、ブルーストとの出会いが時代に刻んだ貴重な痕跡に他ならない。その痕跡からブルーストの世界を新たに生き直す力をくみとることも可能だろう。その口頭発表を中心編まれたのが、本誌における特集「ブルーストと二十世紀」である。

\*

ところでいま、他にあまり例のない試みであると書いたのだが、たしかにブルーストに関する口頭発表やシンポジウムといった研究企画において、その専門的研究者が誰も発表しないプログラムというのは珍しいだろう。ただし二〇一三年という、『失われた時を求めて』の第一編『スワン家のほうへ』が出版されてちょうど百年目という記念すべき年には、純アカデミックなものから軽い読み物風のものまで数多くの出版企画がぐまれば、結果として当然、ブルーストに関する実に多種多様な言葉が、

さまざまな立場の人によって書かれることになった。百花繚乱とも玉石混交とも形容できるこの状況自体にもおそらく分析のメスを入れるべきで、そうすれば、二十一世紀もすでに十年以上たった今、いったい人はベル・エポックを舞台にしたあの巨大な人生の物語の何に惹かれその何を語りたくなるのか、という問いにきつと答えることができるだろう。それは私たちの現在の〈夢〉や〈傷〉や〈祈り〉についても何ごとかを教えてくれるはずだ。しかしその作業をここで展開する余裕はもろんなので、フィリップ・フォレストとアントワヌ・コンパニオンが、それぞれ老舗の文芸出版社の特集に掲載した小論を紹介するだけにとどめたい。そのふたりを取り上げるのは、ともにすでに日本でも名の通った作家であり研究者であるということ以上に、それぞれの示すブルースト像が、一見実に対照的でありながらも、その根底においておなじ志向をもっているように思われるからである。そのことを確認した後に、あらためて本誌の特集へと架橋することにした。

\*

フォレストは「新フランス評論」誌の並々ならぬ力の入れ具合が感じられる分厚いブルースト特集号——執筆者総勢三三名、全体で三二二ページ——の共同編纂者のひとりで、自らの小論のほかに、「ブルーストにしたがって」Dapès Proustと

題したこの特集号の編集意図を緒言で語っている。それによれば、今回の特集号は一九二三年、プルーストの死の翌年に同誌がおこなったような作家へのオマージュ集成ではないし、もちろん、現在あちこちの大学研究機関で追究されているような考証研究のための特集でもないという。今回の特集のねらいは、プルーストにしたがいながらも「プルーストを書き直す」[Récrite Proust]とであつて、というのは「失われた時を求めて」には明らかに「読者自身が作品の第二の作家へと変化する」<sup>1</sup>ように誘いこむ仕掛け——来るべき作品への期待が最後に表明されることによる際限のない円環的運動——があるからである。

したがって読者の一人ひとりが作品を完成させ、読者自身が作品のなかに開いた個人的な道によつて、作品を存在させるのである。こうして、生き生きとした構成要素を作品に授けるのだが、もしなければその要素は作品に欠けたままにとどまっただろう<sup>2</sup>。

フォレストの編集意図が雑誌全体にどこまで浸透したかどうかはともかくとして——実はいささか掛け声倒れの感がなきにしもあらずだが——、さっそく彼自身が書いた「プルーストの階段」という文章をみておきたい。

『失われた時を求めて』という小説は、いわば「妖精譚」とい

うべき様相をしめすとフォレストはまず指摘する。深い森のなかに迷い込んだ登場人物を、妖精や天使といった超自然の存在が不意に現れて救い出すような、そんな神秘的な出現の瞬間にプルーストの作品は事欠かない。「見出された時」の後半のページが読者の感受性にたいして、とくにこの私にたいして及ぼす、たいへんに強い魅力をたしかに説明する」のは、そうした妖精譚風な展開なのである。いうまでもなく、不揃いの敷石につまずくことから始まる一連の無意志的記憶による至福とそれに続く啓示は、レアリスムの配慮とは別種の、寓話的な物語の力によつて運ばれている。それを認めた上でフォレストは、次のような留保をぶつけてくる。

私としてはそんなふうに、文学がどういったものからであれ、誰かしらを救い出せる力があるとはけつして思つてこなかったし、そもそも、この世においてなんとかして善行に励まねばならない、とも思つてこなかったのである。また私は、真実のヴィジョンが、作家やそれを読んだり注釈したりする人々にだけ許された特権とも、けつして考えたことはなかった<sup>3</sup>。

そういつたうえでフォレストは、『見出された時』のプルーストはまるで手品師のようではないかと挑発してくる。そこでは「ハッピーエンド」が実現されているのだが、しかしそんな

手品めいた演出が示す真実よりも、より苦々しく、より深い真実を証言するものが文学ではなからうか、と畳みかける。しかしそう指摘すると、ブルーストにまつわる「宗教性」に必ずや衝突することになるという。その宗教的な確信とは『失われた時を求めて』は、本を書く決心をすることによって、自分の存在によりやく意味を与えることになったひとりの男の物語を語っている」という了解であり、その書かれるべき本は、『失われた時を求めて』に他ならないという直感であって、「ブルーストの予言が見事なまでに幸福に実現された<sup>4</sup>」というわけである。ブルーストが人生の「空無を強調する」のは、「束になつて挑んでくる負の力のすべてに勝利しようと芸術が待ち構えているその様子を、コントラストによって、そして時にはいささか子供っぽい滑稽なうぬぼれまじりに、よりよく浮かび上がらせるため<sup>5</sup>」なのだ。

ブルースト読解の、たしかにある種の典型を戯画化、普遍化している一節と思われるが、フォレストが焦点を定めているのは、文学と救済というきわめて重大な問題にはかならない。その観点において彼が『見出された時』のなかであえて注目するのは、語り手が作品執筆の決意を固めたにもかかわらず、その実現を危うくする死の気配であり、「ブルーストの階段」というタイトルは、語り手がある日外出先で階段を転げ落ちそうになり、それからしばらく人事不省におちいった出来事からきている。そしてフォレストは、階段から転げ落ちそうになつたこ

の出来事と、長い歳月からなる時の連なりを語り手が自分の足元に、それも垂直方向に感じて深い目まいを覚える経験を、一気に重ねてしまうのだが、そのあたりはまさに「ブルーストを書き直す」実践にふさわしい読み込みと思える。そして「ブルーストが自分の作品の最後の言葉にしたいと願つたのは、この目まいであり、それだけなのだ」とすばつと言いつける。ひとはなんとかしてブルーストの作品のなかに、救済 *redemption* が獲得されたという確信を見出そうとするのだが、それは偽造品であり、忍び寄る死の気配を前にした「目まい」が最後の言葉だと受け取ることによって、その条件においてのみ、ブルーストの作品は正しい言葉を聞かせてくれることになるだろう。フォレストはブルーストのことを考えると、階段の途中でぐらつきながらも、しかしそれでも立ったまま私たちに手を振って合図する作家の姿が浮かんでくるといふ。

その手による軽い合図は励ましと別れの身振りのかわりであつて、ブルーストを私たちの隣人とする。ブルーストも、私たちと同様に時の渦巻く目まいのなかへと運び去られるのだ。時というものは、すべてを、私たち自身を、私たちが愛したものを、私たちを愛してくれたものを破壊する。疑う余地のない難破に崩れ去つてゆくのだ。私たちが望むことのできるすべては、その難破を、もう少しだけ辛くはなく、もう少しだけ不名誉ではなく、もう少しだけ確かだ

はないものにするこなのである。  
おそらくは。

フォレストのエッセーはここで終わる。階段でよろめきながらも私たちに手をふって合図をするブルーストは、文学が「望むことのできるすべて」を懸命になしとげようとした作家の、その最後の姿にほかなるまい。死すべき存在である私たちの運命の耐え難さと私たちを待ち受ける暗闇に、ほんの少しだけでも光が差し込めばという祈りを、フォレストは階段のブルーストの合図に見出している。

\*

さて続いて、アントワーン・コンパニヨンのエッセーを紹介しよう。

このエッセーは「マガジン・リテレーレル」社のブルースト特集本に掲載されていて、「人の背丈の『失われた時』」と題されている。タイトルからもすでに内容の見当がある程度つくかもしれないが、ポイントはブルーストの小説にたいして抱かれがちで、とんでもなく長くおまけに理屈がこむずかしくて、しかも何が起きているのかよく分からない、だから手を出さないほうが賢明だ、といった思い込みをまず解消するところにある。「ブルーストはこわい」という冒頭の一文がコンパニヨン

の配慮をよく物語っている。

いかにブルーストはこわくないか、を説得するのがこのエッセーの目的であり、そこに狙いを定めたコンパニヨンは、「失われた時を求めて」を、大方の意表をついて「モリエールの喜劇」に近づける。ブルーストの作品は「語の通常の意味において、喜劇的な小説なのです」といつて、この大作を敬して遠ざける人々の警戒を解こうとする。笑わせるところ、にこつとさせるところがこの作品のなかにはたくさんあるではないか。続く部分を若干長めとなるが引用しておこう。

しかし『失われた時』はまた、より驚くべき意味において、近代の作品としては例外的ともいえる意味において、喜劇なのです。というのも、その結末が幸福なものだからです。近代の作品のきわめて恒常的な特徴のひとつに、『ボヴァリー夫人』や『悪の華』にはじまってカフカやベケットに至るまで、悪く終わる、はじまったときよりも悪く終わる、というのがあります。ところが『見出された時』は、「果てなき崇敬」における啓示とともに、また『仮面舞踏会』というカーニヴァルとともに、最高潮のフィナーレで終わるのです。語り手ははじまって三千ページというものの調子が悪かったのですが、彼はあるものを見つけ、そのおかげで作家としての無能をのりこえ、そして作品を、おそらくは読者が手にしている作品を、実現することになるのです。

小説の最後のほうのページは歓喜にあふれていて、いささかうぬぼれたところすらあります。かつてのヴェリユデラン夫人、現在はゲルマント大公夫人となったそのサロンを満たしているのは、別の時代の残骸であり、それは衰亡の仮面のようにも我を見失った亡霊のようにもみえますが、語り手はそのあいだを動き回りながら、自分だけが自らの前に未来をもっていることを、意識しているのです<sup>7</sup>。

おそらくフォレストがこの一節を読めば、だからこわいののはブルーストではなく、そのブルーストをめぐる宗教的な確信のほうだ、とコメントするのではなからうか。もちろん、ブルーストのテクストを熟知しているコンパニオンが、フォレストの指摘したような「階段」のエピソードを知らないはずもなく、また語り手が作品完成への不安を抱いていたことを軽視していいと思っただけでもない。ということとは問題は、一般向けにブルーストを語ろうとするときに、なにを強調しなにを切り落とすかということであって、その戦略的な選択においてコンパニオンは『失われた時を求めて』は、おそらくは唯一の肯定的内容をもちた近代の作品です。』という、事実の慎重な確認というよりは、多分にパフォーマティブな言明を繰り出すのである。肯定的と彼がいうのは、もちろん作品の最後において生が贖われ、救済の道が開かれる、と読めるからだ。

したがって『失われた時』が喜劇的小説であるというのは、それが滑稽であり笑いを誘うものであるという理由のみならず、『神曲』のように救済をもたらす *redempteur* ものだからなのです。この作品において生は、そのしくじりも、苦しみも、悦楽も、贖われるのです<sup>8</sup>。

文学と救済という観点においても、コンパニオンとフォレストの立ち位置は大きく異なる。ただしここで重要なのは、どちらの考え方が妥当かと議論することでも、また相反する解釈を許すような作品の特異性や、あるいは結果としてそうした特異な形をうんだその生成過程を考えることでもないだろう。注目すべきなのは、ふたりの提示したブルーストの作品解釈が、人が生きることの問いと直結していることだ。倫理的な問いかけが、どちらにおいても重視されている。コンパニオンの短いエッセーの中には、「倫理」*morale* という言葉がなんか姿を現していることも付言しておこう。彼はこうも言っている。「ブルーストは、文学の宗教の預言者であるにもかかわらず、文学が生において役立つものであることを知らないわけではなかった<sup>10</sup>」し、『失われた時』を読むことは——他の小説もそうだが——自分の生の作者になることを助ける<sup>11</sup>」のである。

\*

プルーストを考えるにあたって倫理的な次元が浮上してくるのは、一般読者を意識して書かれた文章なのだから、ある意味それは当然のことではないか、との見方もできるだろう。たしかにそういった側面は否定できないが、しかし単にそれだけのことだと思ってしまうのは間違いだ。というのは、コンパニオンにしてもフォレストにしても、二〇二三年よりも五、六年遡るが、ほぼ同じ時期に、文学と倫理のつながりに関する考察を、ただ単に一般向けのパフォーマンスとは思えぬ調子で展開しているからである。そしてその議論の方向は明らかに一致している。両者の切斷状況を問題視しようというものだ。コンパニオンは、コレージュ・ド・フランスで「プルーストの倫理」*Morales de Proust*という題目の講義を二〇〇七年から翌八年にかけておこない、その講義録の冒頭でこんなふうに述懐している。一〇年前に出版した『文学をめぐる理論と常識』（原著一九九八年）は、「困惑こそ、文学のただひとつの倫理なのである<sup>12</sup>」と最後に書いて終わらせた。ところが、昨年の開講講義「文学、何のために？」では、「文学研究の転回」について私は語っていて、それは「文学の利用とその力のほうへ、働きとしての文学のほうへ、文学のプラグマティスムとしての批評のほうへ」と文学研究がわりつつあることを報告した。それは「倫理的な批評 *la critique éthique*」の外で、そこからたいへん遠いところで成長した私の世代の人間にとっては、単なる「転回」というよりも、「針路変更であり、自己否定であり、裏

切りとすらいえる」。そうコンパニオンは書いている。すぐ続く段落からも、すこしばかり引用しておこう。

私の文学に対する態度は変わったのである。ひとは長いあいだ、倫理の問題 *questions morales* —— とくにあからさまに倫理的問題 —— を文学に対して問うことなしにすませてきた。ひとは長いあいだ、文学とはより賢くしてくれるが、より良くしてくれるものではない、と信じてきた。今や私が思うのは、もし文学のできることが人をより良くすること、すくなくとも悪いところを減らすことであるならば、それで十分ではないか、ということだ<sup>13</sup>。

文学研究における「倫理的転回」*un tournant éthique*とコンパニオンが呼ぶ事態は、二十世紀九〇年代に生じたというのが彼の認識で、以下講義録は、文学の倫理的価値なしは「人間主義的理念」*l'idée humaniste*から脱けだそうとしていた、「理論」重視の世代のことが簡単に振り返られ、その後、「プルーストの倫理」に関する具体的な分析に移ってゆく。

その射程について詳細な検討をくわえるのはまた他日を期すとして、つづいて、『文学と規範性』と題された大部の論集のエピローグとしてフォレストが寄稿している文章を見ることにしよう。そこにはコンパニオンと同じ問題意識が姿を現している。十頁にも満たない短い文章であるが、その冒頭近くの指摘

を以下に引用する。

文学の倫理的機能 *fonction morale* という考え方は、古典美学の目から見れば自明の事柄であった。たいへん長いあいだ当然のこととして、文学は模範を示す *exemplaire* べきものだとされてきた。なぜなら文学の存在理由は、楽しませながら教育することであり、いくつかのモデルを個人に提供することであり、諸価値の総体を伝えることだからである。言い換えれば、文学はある種の倫理と不可分であり、その表現であつたのだ<sup>14</sup>。

逆に現代のわたしたちにとって「この古典的な自明性」は完全に廃れてしまい、もしそんなことを口にしたら「驚くべきナイーヴさ」の持ち主と思われること請け合いである。どんな小説家も「善悪の彼岸」に自分の作品が位置していると誇るのだ。その分かりやすい例としてフォレストはミラン・クンデラをあげ、この中欧出身の作家による小説の定義——倫理的な判断が宙吊りにされる領域——を紹介する。「倫理的判断を宙吊りにすることは、小説の反倫理性ではなく、その倫理なのである<sup>15</sup>」というクンデラの言明は、コンパニヨンの『文学の理論と常識』のラストに明らかに呼応している。ただしフォレストではなく、聖書のアブラハムやヨブの極限的体験を分析する

キルケゴールをクンデラについて援用しつつ、単純な二項対立ではない、たいへん繊細な議論を展開する。そして文学の倫理とは、愛息を神に差し出すアブラハムのような、人間には了解不可能な次元へとむかう運動へと、その不可能な運動へと私たちを導くものであつて、「主体が廃されると同時に成就される<sup>16</sup>」過酷な経験を約束するのだという。この微妙なロジックは、もつと言葉をつくして説明しなければならぬのだが、ここではフォレスト的な倫理を象徴するものとして、階段から合図するブルーストの姿をあげるにとどめよう。そう考えて、おそらく間違いはないはずだ。

\*

文学と倫理的なものとの関係を問い直そうとする試みは、フランス文学研究の言説に、あるいはもつとひろくフランス文学を語る言葉に、なんらかの目立つた変化が今後起きるとするならば、その軸のひとつになりうるのかもしれない。最近では『ポール・リクルールの文学的遺産』と題されたオンライン上のコロックが文学情報サイト *Fabula* に公開され、そこではこの哲学者が提起した「物語的自己同一性」という概念と「語りの力」との関係がしばしば話題となり、そこから文学の倫理的機能を見直すといった議論も目につく<sup>17</sup>。もちろんわれわれの「ブルーストと二十世紀」というコロックは、倫理的なものへの関心の



浮上と呼応して開催されたものではまったくないのだが、ブルーストとその巨大な作品をいかに受け止めるのかという問いは、いかに生き、そしていかに書くかという文学と人生にかかわる根本的な問いをまず意識することであり、これからご紹介する論考のなかでもそれらが直接あるいは間接に問われている。ブルーストを専門とする研究者の場合だと、研究のそれこそ「目まい」がするような厚みを前にたじろいでしまつて、そうした問題にストリートに切り込んでゆくのはなかなか難しい。本コロックにブルースト研究者以外の方ばかりにご登場を願つた理由のひとつは、さまざまな作家・思想家とブルーストの対話を通じて、彼の作品のもつ「力」を、学的展望の中にとらえるのみならず、わたしたちの「生」の問題へと繋げかえすための何かのきっかけをつかめれば、と思つたからである。

以下、本特集号にご寄稿いただいた方の論考を簡単にご紹介したい。全体をおおきく三部にわけて構成した。

第一部は、二十世紀前半から中盤にかけて活躍した三人の文学者——アンドレ・ブルトン、サミュエル・ベケット、ポール・ヴァレリー——とブルーストをめぐる論考を集めた。

まず齊藤哲也（時の黄金を求めて——ブルトンとブルースト）は、ブルトンとブルーストに通底する問題意識を探ろうとする。齊藤は『シユルレアリスム宣言』は「記憶」をテーマとして書かれた「自伝」であるという視点を提示して両者をつな

ぎ、さらにそこから、ブルーストにおける不意の想起やブルトンにおける「オートマティック」の暴力的介入は、ふたりがともに〈出来事〉と〈書くこと〉をめぐる困難な問いを抱えていたことの証左であるとする。そしてその〈書くこと〉をうながす特異な時間経験の方へと議論が展開されてゆき、「ブルジョワ作家」ではなく、「革命」の作家ブルーストという像が提示される。

武田はるか（声の在処、作品のかたち——ブルーストとベケット）は、有名な祖母からの電話のシーンを取り上げ、その「声」の分析をめぐるブルーストとベケットの違いをまず浮き彫りにする。ベケットはこの電話の声に「亡霊」的なものという、いかにもベケット的なテーマを見出して、祖母の声の本质に気づく語り手の経験からは離れてしまう。ただし武田は、ブルーストとベケットの差異のみを強調するのではなく、亡霊のようなベケットの登場人物たちが直面した語ることの困難からさかのぼつて、ブルースト的な「名づけえぬもの」を照らし出そうとする。

塚本昌則（「まどろみの詩学——ブルーストとヴァレリーにおける夢」）は、覚醒と睡眠のあいひろがる「まどろみ」という状態に焦点をあて、「目覚めながら夢見ること」の可能性を、ヴァレリーとブルーストに即して分析している。夢をめぐる、あるいは現実とはなにかをめぐる、偉大な文学者ふたりの刺激的な対話である。しかしふたりの文学者が夢にむける関心は、交差しながらもずれていく。詩人にとっては覚醒時にはあ

りえぬ「生成状態」の把握が問題であるのにたいし、小説家にとって大切なのは、夢のもつ「現実そのものを再構築する力」なのである。

第二部としては、ブルーストを論じる思想家についての、いいしは思想的な展望においてとらえられたブルーストについての論考を四篇集めた。

澤田直（「他者の現象学——ブルーストを読むサルトル」）は、若きサルトルのブルーストへの傾倒ぶりをみたのち、サルトルによるブルースト批判の思想的背景を分析する。さらに澤田は、アルベルチヌという「捉えがたい他者」が、とくにレヴィナスにとって思考をうながす積極的な契機であったことを指摘し、そこから同性愛のテーマにおける「他者経験」がブルーストからサルトルへと繋ぐ重要な線であることを明らかにする。その「同性愛のトポス」において「独自と普遍を結びつける鍵」があったと論じている。

岩野卓司（「ブルーストと供犠——バタイユ流『失われた時を求めて』の解釈について」）は、やはり若きバタイユにとってもブルースト読書が重要であったことを指摘した上で、『内的経験』におけるニーチェの章に挿入された、ブルーストについての「余談」に注目する。そこでバタイユは「内的経験」の先駆者としてのブルーストを評価し、彼との「共犯感情」まで語る。他方、供犠として解された「ポエジー」という観点から、ブル

ーストが「作品による作者の殺害」という極点に達する道を歩んでいたともされる。意外なことにバタイユにとって、ブルーストはニーチェとパラレルな関係にあった、と岩野は結んでいる。

合田正人（「マルセル・ブルーストとシャルル・ルヌヴィエ」）は、シャルル・ルヌヴィエという十九世紀に活躍したものの、今では「死せる哲学者」と呼ぶべき人物に焦点をあてる。合田はまず、ブルーストが薫陶をうけたダルリユやセアイユがルヌヴィエを論じている事実を掘り起こす。両者を結ぶ線はまだ明快に引くことはできないのだが、ドゥルーズやリクールの断片的な言及などを手がかりに、合田はこの「反ベルクソンの」な哲学者とブルーストの関係をあぶりだしてくる。断片と全体の関係、習慣の問題、あるいは間歇性といった論点がたぐりよせられ、思想史の隠れた地図の中にブルーストの場所も書き込まれてゆく。

吉川佳英子（『失われた時を求めて』のスワンとオデットの結婚をめぐる——フーコーの理論を援用しながら結婚の意味を探る——）は、湯沢英彦とともにコロックスの共同コーディネーターであり、会場では口頭発表をおこなわなかったが、この特集号のために寄稿していただいた。吉川は、高級娼婦であるオデットとの結婚が、ユダヤ人スワンにとってどのような意味をもちえたのかを、社会的背景やいくつかの一九世紀小説を確認したのち、フーコーによる「性の言説」の分析を参照しながら

ら考察している。ブルジョワ階級特有の「身体と健康」への関心、さらには永続的な繁栄への希求を、吉川はスワンへも援用しつつ、さらに草稿資料なども確認して、そのオデットとの結婚の裏には、「ブルジョワの家庭観」に依拠する「幸福な家族」への夢があったと論じている。

第三部は、小説の困難ないし一人称の受難と呼べる観点から、三つの論考を配した。

まず拙稿（「記憶」という遊び——ミッシェル・レーモン先生に捧げて）である。わたし自身は前述したようにコロックの共同コーディネーターであり、当日は会の運営に専念していたが、ブルースト研究者からの応答の一例として拙稿を読んでいただけではさいわいである。昨夏逝去された恩師の著作をたどりつつ論じる、といういささか異例のかたちの文章となったが、「自己の自己による取り戻し」（レーモン）というブルースト的な救済の企てが、いかなる事情で要請され、またその企ての困難がいかに回避されたのかを、戦間期の「靈性」をめぐる議論やまたレリス、セリーヌなどに言及しつつ、ラフにスケッチしてみた。

石川美子（ブルースト的〈小説〉の夢——ロラン・バルト）は、七七年十月の母の死を契機に〈小説〉の執筆を模索し始めた、最晩年のバルトについて論じている。石川は日記や講義ノートの時系列にしたがって紹介し、〈小説〉の試みが、ブル

ーストと俳句を經由して、まず「明るい部屋」に至る経緯を跡づける。しかしその後も〈小説〉の準備はなかなかすすまない。小説『新たな生』は構想に終わってしまったのだが、バルトは、母の喪のなかで小説を書いたブルーストを必要としたのであり、ブルーストに導かれて〈小説〉に達することを願っていた、と石川は述べている。

野崎敏（大いなる遺産——ブルーストと現代フランス小説）は、現代作家たちが、ブルーストという「遺産」をどのようにうけとめているのかを整理している。あまりにも偉大な作家という見方（クロード・アルノー）がある一方で、流行現象ともいいうる「オートフィクション」には、ホモセクシャリティを敢然と引き受けてそれを語り力とする傾向があつて、そこにはブルーストに対する一定の批判がありうるだろう。またブルースト的な繁茂し増殖する主観性への意外な接近（ジャン＝フリップ・トゥーサン）、あるいはそれへのあからさまな離反（ミッシェル・ウエルベック）を指摘して、最後に野崎はモデリアノに言及し、その記憶を主題とする数々の作品を、ブルーストという「大いなる遺産」を背負った世代における創造のあり方を問いかけるものと位置づけている。

以上が、本特集号に集められた論考の、ごく簡単な紹介である。ブルーストという作家が続く世代にあたえたインパクトの多様な形を確認できると同時に、ここには、ブルーストを軸とした二十世紀のフランス精神史の地図が、たいへん興味深い線

とともに浮かび上がってきているように感じられる。その隙間や余白を、さらに密に埋めてゆくための試みを続けてゆければと思う。

## 註

- 1 Philippe Foreste, «Avant-propos» in *D'après Proust*, sous la direction de Philippe Foreste et de Stéphane Audegy, *La Nouvelle Revue Française*, Gallimard, N° 603-604 – mars 2013, p.9.
- 2 *Ibid.*
- 3 Philippe Foreste, «Proust et l'escalier» in *D'après Proust, op.cit.*, p.157.
- 4 *Ibid.*, p.161.
- 5 *Ibid.*, p.158.
- 6 *Ibid.*, p.163.
- 7 Antoine Compagnon, «*La Recherche* à la hauteur d'homme» in *Marcel Proust*, Magazine Littéraire : Nouveaux Regards, fév. 2013, p.37.
- 8 *Ibid.*, p.38.
- 9 *Ibid.*, p.39.

- 10 *Ibid.*, p.40.
- 11 *Ibid.*, p.41.
- 12 マントワース・ロン・ニヨン『文学をめぐる理論と常識』中地義和、吉川一義訳、岩波書店、二〇〇七年、三〇六頁。
- 13 Antoine Compagnon, Cours : «Morales de Proust» in *Résumés Annuels du Collège de France*, p.724. [http://www.college-de-france.fr/media/antoine-compagnon/UPL49209\\_Antoine\\_Compagnon\\_cours\\_0708.pdf](http://www.college-de-france.fr/media/antoine-compagnon/UPL49209_Antoine_Compagnon_cours_0708.pdf)
- 14 Philippe Foreste, «Paradoxe d'hier, préjugé d'aujourd'hui» in *Littérature et exemplarité* sous la direction d'Emmanuel Bouju, Alexandre Gefen, Guiomar Hauteceur et Marielle Macé, Presses Universitaires de Rennes, 2007, p.397.
- 15 Milan Kundera, «Le jour où Prague ne fera plus rite» in *L'Infini* n°39, automne 1992 ; cité par Ph.Foreste, *Op.cit.*, p.399.
- 16 Philippe Foreste, «Paradoxe d'hier, préjugé d'aujourd'hui», *Op.cit.*, p.403.
- 17 *L'héritage littéraire de Paul Ricœur* (colloque en ligne), organisé par la Chaire du Québec contemporain de l'Université Sorbonne Nouvelle—Paris 3, en collaboration avec le Centre de recherche sur les arts et le langage (EHESJ/CNRS) et avec le concours du Fonds Ricœur, <http://www.fabula.org/colloques/sommaire1852.php>